二〇二六年度

二月一日午後入試

国　語（45分）

注意

1　開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。

2　答えはすべて解答用紙の解答らんに、はっきり書きなさい。

3　終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。

4　問題のページは、1－1から2－13までであります。

実践女子学園中学校

一　次の[Ⅰ]・[Ⅱ]の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（字数制限のある場合は、句読点や記号も字数に数えます。）

[Ⅰ]

■縮減の時代に起きたこと

国連の推計にも明らかにされているように、二一世紀の終わりごろには、アフリカや中国、インドも含めて、人口成長率がゼロ近くまで低下するといわれています。産業革命以降の人口増大期は「近代」とよばれてきましたが、①この時代がいよいよ終わりを告げようとしているわけです。

他方、人口減少が一定期間続くと、農業革命やエネルギー革命、産業革命といったイノベーション※が起き、再び人口は増大局面を迎えることとなります。注意したいのは、この人口減から人口増に向かう転換期には、必ず人間と人間の協力関係が再構築され、そのなかから現代の「公共性」につながる動きが生まれてきたということです。

以下、鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』（二〇〇〇年）を参考に、②日本の例をみてみましょう。

最初の人口停滞・縮減期は、縄文時代の末期です。歴史学者の網野善彦が指摘するように、当時の平均寿命は三〇歳と短く、③自然と人間の緊張関係のもと、高齢者や障がい者も含めて人間どうしが対等で、助け合って生きていました（網野　一九九七）。この人口減少期を経て、稲作農耕の受容と国家形成を柱とする弥生文化が登場し、身分制の社会への扉がひらかれることとなりました。

続けて、人口の停滞・縮減に苦しめられたのは、平安・鎌倉時代です。農業生産の行き詰まり、疫病の流行、さらには、温暖化、乾燥化が重なることで、人口停滞期が訪れました。農業危機のなかで、新たな土地の開発をめざす人々は、権利の保障を大寺社や大貴族に求め、※荘園制という新しい土地制度が生まれました。軍事の担い手である武士たちは主従関係を結び、それはやがて、鎌倉幕府という新しい政治権力を生み出しました。また、宗教面では、浄土真宗や日蓮宗のような、これまでの仏教に対する批判を掲げる信仰が生まれ、各地で独自の集団が形成されていきました。人々は、それ以前と違う人間どうしの結びつき方を模索したのです。

三度目の人口停滞・減少期は、江戸時代です。エネルギーと食料を自給自足でまかなってきた鎖国期の日本にとって、打ち続いた自然災害、そして④頭打ちとなった新田開発は、一八世紀から一九世紀にかけ三度目の人口停滞期をもたらしました。この時期は、領主によって行われていた貧民救済（「御救」）が、⑤庄屋や名主といった村役人に代替され、村と村の枠組みを超えたニーズを満たすための組合村が生まれました。さらには、幕末の戦乱に侍以外の層が組み込まれることで、支配層の再編、※「おおやけ」の変化が起き、明治期の近代国家が準備されました。

このように、近代以前の時代のなかで、人口が減少し、増大に転じる時期には生活・生産空間における※「私」、人間と人間の※「共」の担い手と範囲、そして、※おおやけとしての「公」のあり方が大きく変化してきました。

四回目の人口停滞期に差しかかったいま、日本社会のあちこちでこれらの中身、関係の変化が起きはじめています。とくに、「生活の場」と「生産の場」の支え合いのなかで生活のニーズを満たしてきた日本社会

にあっては、この問題はとりわけ重要です。そこで、少子高齢化や過疎地域の衰退といった問題に光を当て、これらの問題を乗り越えるために、人々がどのような変化を巻き起こしつつあるのか、具体例をみていくこととしましょう。

■地域の発展と企業の発展を結びつける

少子化問題をみるとき、茨城県常陸大宮市にあり、医療、介護、リハビリを総合的に運営する医療法人博仁会の取り組みは、私たちに大きな希望を与えてくれます。

理事長の鈴木邦彦さんは、出生率を高める方法は明白だと主張します。それは、産休・育休の充実、短時間勤務、そして保育施設の整備をしっかりと行うことです。

博仁会は、女性の職員さんの産休・育休の取得率がほぼ一〇〇％です。また、〇歳から三歳までの子どもをもつ職員さんに対しては、本人の希望に即して夜勤を免除し、仕事の開始時間を遅らせ、帰宅時間を早めるという短時間勤務措置をとっています。さらに、二〇一一年には院内保育所を設置しました。子どもと一緒に出勤・帰宅ができ、昼休みや子どもが病気になったときも、すぐに様子をみにいくことができます。

産休・育休によって出産の不安をやわらげ、職場復帰した人たちが子育てと就労を両立できるようにするための切れ目のない措置です。この措置が功を奏して、博仁会に勤務する女性職員さんの普通出生率は、全国平均、茨城県、常陸大宮市のいずれをも大きく上回っています。

一方、⑥これらの取り組みが法人経営に見逃せない負担を負わせているという問題があります。医療や介護への従事者が多い都道府県では、出生率が高いことが知られています（『日本経済新聞』二〇一四年八月二一日付）。出産期、育児期の環境整備※がともなっていけば、きわめて有効な少子化対策となるのですから、こうした取り組みに対する財政的な支援は真剣に考えられるべきです。

ただ、他方で、地域を発展させ、人口減少を食い止めることが患者数や利用者の増大を生むからこそ、博仁会が⑦こうした取り組みを率先して行ったという現実もあります。病院だけでなく、企業＝私の領域は、収益をあげることを目的にしています。しかし、⑧人口が減少する社会では、収益をあげることと企業の「共」による社会的な貢献が矛盾しない状況を作らなければならなくなるということを示唆しています。

今度は高齢化のほうから問題を捉え返してみましょう。人間は誰もが最期のときを迎えます。厚生労働省「『介護保険制度に関する世論調査』について」をみますと、「［　A　］」と答える人の割合が最も多い反面、介護を受ける際に最も困る点は「［　B　］」だと答えています。ここに、人生の終わりにあって、自分の家で介護を受けたいと願いつつも、家族への配慮から、施設への入所を強いられざるをえないという現実が見え隠れします。

広島県の福山市に拠点をもつNPO法人「地域の絆」の代表である中島康晴さんは、小規模多機能の介護事業を通じて、家族とともに、自分の生きてきた地域のなかで終わりのときを迎えたいと願う高齢者の思いと向き合って活動を続けています。

「地域の絆」が取り組んできたのは、介護を地域に「ひらく」ことでした。ある印象的な認知症患者への支援事例を紹介しましょう。

認知症高齢者の一人暮らしと聞くと、私たちは、「徘徊」「火の不始末」「不衛生」等のリスクをまっさきに想像してしまいがちです。でも、このような偏見は高齢者の地域での生活を難しくしてしまいます。こうした先入観を取り除くために職員さんたちが最初に取り組んだのは、実際に起きうる問題を地域で事前に説

明し、リスクの予測可能性を高めることでした。

職員さんは、利用者さんとともに戸別訪問を行い、ご近所さん、出入り禁止となっていたスーパー、徘徊時に利用するタクシー会社、そして警察署などに対して、起きがちな行動を一軒一軒説明して回りました。

問題が事前に予測できれば、対応も可能になります。⑨地道な努力の結果、スーパーの利用が認められ、タクシー会社からは徘徊時に事業所に連絡が寄せられるようになりました。警察も利用者さんを事業所に送り届けてくれるようになったそうです。それだけではありません。地域全体が自分の親を見守るさまを目の当たりにし、家族も疎遠になっていた利用者のもとを訪ねるようになりました。

「地域の絆」は、わずか一〇年のあいだに事業所を県内全域にひろげ、いまでは九カ所の事業所を構えるまでになりました。⑩介護を地域に「ひらく」という試みは、人間のいのちにかかわる情報を地域全体で共有しあい、一つの家族のように、苦労や喜びを分かち合うことでもあります。そして、このことが企業の経営を支える重要な土台となっているのです。政府の提供する介護、人間の支え合い、そして企業の収益、⑪「保障の場」「生活の場」「生産の場」の新しい結びつき、調和をみてとることができます。

■過疎地域で起きつつあること

⑫「消滅」さえもが叫ばれる過疎地域。そこでは、人々が生活の危機に直面しているからこそ、社会の変化がどこよりもはっきりと浮かびあがります。

「限界集落」という用語の発祥の地でもある高知県大豊町庵谷地区では、つい最近まで水道が通っていませんでした。県の英断によって簡易水道が敷かれることとなりましたが、施設管理はすべて集落の住民に委ねられています。住民は、料金を自分たちで決め、徴収なども自分たちで行い、高齢化がさらに進む将来のために、清掃や維持のための費用を料金に上乗せして積み立てています。

日本の集落は、歴史的に水の利用権をめぐって、激しい対立を繰り返してきました。庵谷地区でも地域内のすべての水源に、水の利用権である「水利権」が設定され、集落どうしの対立の原因となってきました。このような深刻な歴史があるからこそ、水源地の地権者がなかなか水道の設置に協力してこなかったのですが、集落存亡の危機に直面するなかで、土地の所有者が、水源の提供を申し出るという決断をしたのです。⑬歴史的な対立を乗り越え、生きるために人々は協力を始めたのです。

大豊町からほど近い場所にある土佐町の石原地区をみてみましょう。石原地区の人々は、ガソリンスタンドやスーパーを提供していたＪＡ（農協）が地区から撤退するという問題に直面しました。※生活店舗がなくなるばかりか、買い出しに必要な自動車やバイクのガソリンさえ手に入らなくなるというまさに緊急事態でした。ここでも住民は、四つの集落の垣根を越えて、「いしはらの里協議会」を創設し、ガソリンスタンドと生活店舗を地区住民が自主的に経営することを決定しました。

いま、過疎地域で起きているのは、生存や生活のニーズに迫られるなかで、人々がさまざまな垣根や困難を乗り越えて協力しあうという動きです。それだけではありません。水道施設であれ、ガソリンスタンドであれ、生活店舗であれ、社会的な資源の「共有化」⑭が進められていることも注目すべき点です。

ただ、それは、財産の共有が当たり前だった江戸時代の村落秩序に戻るという単純な話ではありません。財政という生活保障システムができ、また、男女や年齢の違いが超えられ、さらには、若い人たちなどの「よそ者」が流入することさえ、地域の人々は受けいれつつあります。まさに新しい「生活の場」が生まれ、「生産の場」のあり方も変化を遂げつつあるのです。

■三つの場を鋳なおす多様性の時代

このように都市部でも過疎地域でも、人口の急激な減少や人間関係の希薄化を背景としながら、「生活の場」と「生産の場」の再編が進んでいます。

たとえば、私が住んでいる神奈川県の小田原市も例外ではありません。小田原市では、二〇一六年度から乳幼児の医療費助成の所得制限がはずれ、小学校入学までの子どもは誰もが医療をタダで受けられるようになりました。また、小田原市を含む神奈川県内の自治体では、自治会のコミュニティ機能を活かしながら、見まもり介護や地域おこしへの取り組みを活発化させています。⑮ここでも「保障の場」の機能が強化される一方、他方で「生活の場」が「保障の場」で果たされるべき役割を補完しているのです。

あるいは、地方創生のかけ声のもと導入された「地方中枢拠点都市」もそうです。これは、地方に拠点となる都市を設け、東京への一極集中を阻止するための「人口のダム」を作ろうというくわだてでした。その是非はともかく、その背後には、地方自治体が国の「おんぶにだっこ」になるのではなく、拠点となる都市と周辺自治体との水平的な助け合い、協働を推し進めようとする意図がありました。これもまた、国と地方自治体、自治体と自治体という「保障の場」の再編を意味するものだったということができます。

私たちはこれから、人口が急激に減少し、経済の成長がかつてほどには見通せない時代を生きていくことになります。気持ちはどうしてもふさぎがちです。

⑯でも、「希望」はあります。人間に大切なのは、人口増大や経済成長そのものではなく、どのように人間らしい生活を維持していくか、どのように将来の不安をなくしていくかということです。生活に必要なニーズを三つの場を鋳なおして満たしていく――まさにいま、地域が人口や経済の規模に応じて「生活の場」「生産の場」「保障の場」のそれぞれに力点を置きながら、それぞれの形で生活ニーズを満たしあっていく、そんな多様性の時代が訪れようとしているのです。

（井手英策・宇野重規・坂井豊貴・松沢裕作『大人のための社会科――未来を語るために』より）

※（注）

イノベーション――革新的な技術やアイディアによって大きな変化をもたらすこと。

荘園制――貴族や寺社の私有地である「荘園」を基盤とした社会制度。

「おおやけ」――もとは「大きな家（＝おおやけ）」をさし、そこから朝廷や幕府、政府、国家といった支配者をさすようになった。

「私」――職場などの社会的集団の中における存在に対して一個人としての存在を示すときに用いられる言葉で、主に家族や友人といった範囲を指す。

「共」――「共通の」という意味を表し、社会で共有すべきものやサービスを指すことが多い。本書の別のページでは「共」を「助け合い」とも定義している。

おおやけとしての「公」――朝廷や幕府、政府、国家といった支配者。

財政――国や市町村などが行政活動や公共政策の遂行のために行う、資金の調達・管理・支出などの経済活動のこと。民間だけでは満たせない公共活動の運営や、税金によって格差を調整する活動などが含まれる。

生活店舗――生活に必要なものを売る商店。

Ⅱ

■希望と社会科学

このような希望の概念は、社会科学とどのようなかかわりがあるのでしょうか。

現在の社会科学において、希望と似た概念として「幸福」を指摘することができるでしょう。人々はいかなる条件のもとにあるとき「幸福」と感じるのか。主として、所得や経済成長と人々の幸福感との関係を探る研究が、「幸福の経済学」の名のもとで展開されています。よく知られているように、ある段階までは所得の伸びと、人々の幸福感とのあいだには、明らかな結びつきがあります。しかしながら、所得も一定の段階に達すると、幸福の増進にはつながらなくなります。人々は幸せを、経済的豊かさ以外のものに求めるようになるからです。個人の自由やコミュニティとの結びつき、健康や文化的な生活などがそれです。

それでは、幸福と希望とはいかなる関係にあるのでしょうか。一つ指摘できるのは、希望には時間という次元が入ってくるということです。幸福が現在の生活に対する満足を示すとすれば、希望にはいまだ実現していない未来へのかかわりが含まれます。すなわち、希望には、現状に満足せず、未来において何らかの変化を引き起こそうとする契機があるのです。「まだーない」未来へのコミットメント※こそが、希望の希望たる本質を成しているのです。

希望と対比できる概念としては、「未来予測」をあげることもできます。何らかの意味で未来を予測したり、そこで起きうる機会とリスクを計算したりすることについては、社会科学においてもさまざまな試みがなされてきました。しかしながら、ここまでも述べてきたように、希望がむしろ、未来がはっきりと示されていない時代にこそ着目されてきたことを考えると、希望と「未来予測」や「リスク・マネジメント」などとを同一視することはできません。

現在の私たちは、未来について、きわめて見通しの悪い時代を生きています。二世紀以上にわたって進歩主義が優位してきた「第一の近代」はもはや過去のものとなりました。そうだとすれば、いま、私たちに必要なのは、安易に未来を語ることではありません。

もちろん、人口や人々の寿命、社会保障や財政状況、さらにはＡＩがもたらす影響など、いろいろな未来予測が話題になっています。これらの予測には、確固としたデータに基づくものもあれば、むしろ数少ない要因から未来を強引に推測しようとするものもあります。いずれにせよ、それらの未来予測に基づいて、私たちは社会やそこでの自分の暮らしについての判断を行っていきます。あるいはそこでのリスクを減らすよう、努力しています。

とはいえ、本質的に見通しの悪い時代を生きている私たちは、限定された情報に基づいて未来をこうなるものだと決めつけることには慎重であるべきでしょう。未来にはつねに不確定性があります。それは私たちにとって不安をもたらすものであると同時に、可能性を感じさせてくれるものでもあります。

人間とは未来を完全に予測できても、逆に未来をまったく予測できなくても、生きていく力を得られない生き物です。人間はある意味で、自分が本当に何を希望しているのか、よくわからないままに行為し、行為ののちに自分の希望に気づくこともあります。人間の主体性そのものが、そのような行為の過程で変化していくからです。

社会科学の務めは、未来を完全に予測することでも、逆にそれをランダムな偶然的現象として捉えることでもありません。人間の知が何を、どこまで明らかにすることができるのか、逆に、どこからははっきりしたことをいえないのか。これらのことを自覚的に追究していくことが、社会科学の課題です。

（井手英策・宇野重規・坂井豊貴・松沢裕作『大人のための社会科――未来を語るために』より）

※（注）　コミットメント――責任感をもって主体的に取り組んだり、実行を約束すること。

問一　――線①「この時代がいよいよ終わりを告げようとしているわけです。」とありますが、「この時代」とはどのような時代のことですか。解答らんの「時代」につながるように文中の言葉を使って二十字以上二十五字以内で答えなさい。

問二　――線②「日本の例をみてみましょう。」とありますが、「日本の例」とは何に関する「日本の例」のことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　人口の減少によって人間どうしの協力関係が作りかえられて現代の「公共性」につながる動きがもたらされ、その際にイノベーションが発生し、人口が増大したという人類の発展。
イ　人間と人間との協力関係が再構築されて人口が減少し、それによってイノベーションが発生して人口が増大するようになり、現代の「公共性」が生みだされてきたという時代の変化。
ウ　人口の増大によって人間と人間との協力関係が再構築され、それによって現代の「公共性」が形作られ、イノベーションが発生する転換期がもたらされてきたという社会の推移。
エ　人口減少が続くとイノベーションが発生して再び人口が増大し、その際に人間どうしの協力関係が作りかえられ、現代の「公共性」につながる動きが発生してきたという人間の歴史。

問三　――線③「自然と人間の緊張関係」とありますが、どのような状態のことだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　厳しい自然環境下での生活のために、人間の生存がおびやかされる事態がいつ発生するのかわからない不安定で気のぬけなかった状態。
イ　人間と自然とが対立することなく対等な立場でたがいに支え合い、豊かな自然環境が絶妙なバランスで保たれ続けていた状態。
ウ　自然環境の変化や災害などによって、短くなってしまった平均寿命をどうにかして延ばそうと人々が必死にもがいて生活していた状態。
エ　高齢者や障がい者も含めた人間たちが協力し合って自然を開発し、より豊かな生活を手に入れようと気を引きしめていた状態。

問四　――線④「頭打ちとなった新田開発」とありますが、どういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　自然災害によって新しく開発した田んぼに大きな被害が発生したということ。
イ　増加し続けていた新しい田んぼが一定数に達して増えなくなったということ。
ウ　災害や人口の停滞によって新しい田んぼの開発が不可能になったということ。
エ　人口の増加によって新しく開発した田んぼの数が足りなくなったということ。

問五　――線⑤「組合村が生まれました。」とありますが、「組合村」が「生まれ」たのはどのようなできごとがあったからですか。文中の言葉を使って二十字以内で説明しなさい。

問六　――線⑥「これらの取り組み」とありますが、この「取り組み」の目的が書かれている部分を文中から四十字以内でぬき出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問七　――線⑦「こうした取り組み」とありますが、どのような「取り組み」のことですか。それが最もよくまとめて表現された部分を文中から十字以上十五字以内でぬき出し、初めと終わりの三字を答えなさい。

問八　――線⑧「人口が減少する社会では、収益をあげることと企業の『共』による社会的な貢献が矛盾しない状況を作らなければならなくなる」とありますが、「医療法人博仁会」の事例における「収益をあげることと企業の『共』による社会的な貢献が矛盾しない状況」とはどのような状況のことですか。解答らんの「という状況。」につながるように文中から三十五字以内でぬき出し、初めと終わりの四字を答えなさい。

問九　文中の［A］・［B］にあてはまる言葉として最も適当なものをそれぞれ次のア～エの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

［A］

ア　現在の住まいで介護を受けたい
イ　病院に入院して介護を受けたい
ウ　介護付きの有料老人ホームや高齢者住宅に住み替えて介護を受けたい
エ　特別養護老人ホームや老人保健施設などの介護保険施設に入所して介護を受けたい

［B］

ア　介護に要する経済的負担が大きいこと
イ　人生の楽しみが感じられなくなること
ウ　家族に肉体的・精神的負担をかけること
エ　収入がなくなること

※内閣府「介護保険制度に関する世論調査（平成二十二年九月調査）」をもとに選択肢を作成（https://survey.gov-online.go.jp/h22/h22-kaigohoken/2-2.html）。

問十　――線⑨「地道な努力」とありますが、何のために「地道な努力」に取り組んだのですか。解答らんの「ため。」につながるように文中の言葉を使って三十字以内で説明しなさい。

問十一　――線⑩「介護を地域に『ひらく』という試みは、人間のいのちにかかわる情報を地域全体で共有しあい、一つの家族のように、苦労や喜びを分かち合うことでもあります。」とありますが、「介護を地域に『ひらく』という試み」の事例としてあてはまらないと考えられるものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　ボランティアの活躍できる場所を施設内に限定せずに、施設外での見守りや交流会といった活動にも参加できるようにする。

イ　介護の必要の有無にかかわらず、介護施設を赤ちゃんから高齢者までが利用できる場所として利用者の交流を活性化させる。

ウ　自宅で過ごす高齢者に関する情報を家族や病院関係者、介護施設関係者がパソコンを使って共有できる仕組みを設計開発する。

エ　自治体が行っている公的介護支援サービスについて、自治体が関わることを一切やめて民間企業に運営をすべてまかせる。

問十二　――線⑪「『保障の場』『生活の場』『生産の場』の新しい結びつき、調和をみてとることができます。」とありますが、「保障の場」「生活の場」「生産の場」の指す具体的なものの組み合せとして最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　「保障の場」…人間どうしのつながりを生み出す家庭
　「生活の場」…一日の大部分を過ごす学校や職場
　「生産の場」…食料を生産する田畑や製品を生み出す工場

イ　「保障の場」…公的サービスを提供する国や地方自治体
　「生活の場」…消費活動を行いながら日々のくらしを送る家庭
　「生産の場」…くらしに必要な給与を得る職場や食料を育てる田畑

ウ　「保障の場」…くらしに必要な賃金を与えてくれる職場
　「生活の場」…実際にくらしていく場所となる国や市町村
　「生産の場」…生存に必要な食事や人間関係をつくる家庭

エ　「保障の場」…人々のくらしを支える国や市町村
　「生活の場」…毎日を過ごすことになる職場や学校
　「生産の場」…くらしに必要なモノを作り出す工場

問十三　――線⑫『消滅』さえもが叫ばれる過疎地域。そこでは、人々が生活の危機に直面しているからこそ、社会の変化がどこよりもはっきりと浮かびあがります。」とありますが、「過疎地域」において「どこよりもはっきりと浮かびあがる「社会の変化」とはどのようなことを指していますか。解答らんの「が生じてきていること。」につながるように文中から四十五字以上五十字以内でぬき出し、初めと終わりの五字を答えなさい。

問十四　――線⑬「歴史的な対立を乗り越え、生きるために人々は協力を始めたのです。」とありますが、これについて次の1・2の問いに答えなさい。

1　「歴史的な対立」とはどのような対立のことですか。できるだけ文中の言葉を使って十五字以上二十字以内で答えなさい。

2　「人々は協力を始めた」とありますが、ここでの「歴史的な対立を乗り越え」て「人々」が「始めた」「協力」とはどのようなことを指していますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　土地の所有者が水源の提供を申し出て簡易水道の設置を可能とし、施設管理や料金の徴収などを集落の住民の手によって行い始めたこと。

イ　県の英断によって敷かれた簡易水道について土地の所有者が水源を提供するとともに、料金の決定や徴収、清掃などを担当し始めたこと。

ウ　それまで農協が運営していたガソリンスタンドと生活店舗の営業を、複数の集落の住民が協議会を創設して自らの手で運営し始めたこと。

エ　JAが提供していたガソリンスタンドや水道、生活店舗などを地区住民が共有化して料金徴収や施設管理などを自主的に担い始めたこと。

問十五　――線⑭「江戸時代の村落秩序」とありますが、ここで言われている「江戸時代の村落秩序」とはどのような体制だと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　国や市町村が住民の財産を取り上げて管理しており、男性と女性、若者と老人といった違いによって身分が自動的に決まってしまい、集落の外にいる「よそ者」と出会わないように自分の村の中だけにとじこもる体制。

イ　住民の財産が共有されていることで国や市町村の任務としての財政という制度が必要とされず、男女の違いや年齢の違いといった個性は大切にされたものの、若い人の流入によって人口が増加することは望まない体制。

ウ　国や市町村の任務としての財政という仕組みが成立しておらず、性別や年齢による立場や役割やふるまい方が決められており、同じ集落の住民だという一体感が強いために新しい住人が入ってくることをいやがる体制。

エ　住民の財産が共有されてはいるものの、国や市町村の任務としての財政という考え方が存在していないために生活が保障されておらず、身分が固定されているために「よそ者」と関係を持ちたくても交流しにくい体制。

問十六　――線⑮「ここでも『保障の場』の機能が強化される一方、他方で『生活の場』が『保障の場』で果たされるべき役割を補完しているのです。」とありますが、どういうことですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　市町村や国の行う住民生活を守る取り組みが活性化するとともに、一方でそれぞれの地域や家庭が自治体からの支援や公助をたよりにせずに自分たちで問題を解決しようと自助に励んでいるということ。

イ　自治体の行う住民への生活支援が十分に行われていないことに対して、地域社会がもともと持っていたコミュニティ機能を活用して地域おこしや介護といった活動に活発に取り組み始めたということ。

ウ　市町村や国によって行われる乳幼児の医療費助成などの住民サービスが悪化したことに対して、それぞれの地域社会や家庭が自分たちの手で不足するサービスや業務を提供して補っているということ。

エ　自治体の行う医療費助成などの住民サービスが向上するとともに、本来は国や市町村の役割でありながら十分に対応できていない仕事を地域社会の人々が補って行き届くようにしているということ。

問十七　――線⑯「でも、『希望』はあります。人間に大切なのは、人口増大や経済成長そのものではなく、どのように人間らしい生活を維持(いじ)していくか、どのように将来の不安をなくしていくかということです。」とありますが、「希望」について同じ本の別の章で別の筆者によって述べられている部分を示したものが文章Ⅱとなります。次のア～エの中から文章Ⅱの内容としてあてはまらないものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア　収入が一定の段階になると人々は経済的な豊かさとは異なるものに幸福を求めるようになっていくため、所得の増加がそのまま人々の幸福感の増加にはつながらなくなっていき、人とのつながりや心身の健康、文化的生活などを幸福と考えて求めるようになる。

イ　幸福が現在の生活に対する満足を示すものであるのに対し、希望は現在の状態に満足することなく未来に何らかの変化を起こそうというきっかけとなるものだということができ、未来に対して主体性をもって取り組む態度こそが希望というものの本質と言える。

ウ　未来について見通しの悪い時代を生きている私たちが希望をもって生きていくためには、今後の社会の姿がどのように変化していくのかを正確に予測してリスクをなくしていくことによって、未来への見通しをよくしていく努力を続けていくことが必要である。

エ　未来がつねに不確実なものであることによって私たちは不安を感じることになるとともに、可能性を感じることができるので、限定された情報で未来を決めつけるのではなく、人間の知が何をどこまで明らかにできるのかを自覚して追究することが大切となる。

二　次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一　次の①～⑤の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

① 旅行の費用をセッパンする。
② テンケイ的な日本料理だ。
③ 新商品のセンデンに力を入れる。
④ ミツユ業者をきびしく取りしまる。
⑤ 行列が町をネり歩く。

問二　次の①～④の――線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

① 竹馬の友とは幼なじみのことだ。
② 意見が変わってばかりで節操がない。
③ 六年生による寸劇が始まった。
④ 動物が急に暴れ出す。

問三　次の①～④の漢字の共通している部首の名前をそれぞれひらがなで答えなさい。また、その部首の意味として最も適当なものをそれぞれ後のア～コの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① 列　別　利　則
② 快　情　性　慣
③ 胸　腹　肺　脈
④ 熱　然　無　点

ア 太陽　イ 穀物（こくもつ）　ウ 火　エ 心　オ 村
カ 言葉　キ 刃物（はもの）　ク 手　ケ 鳥　コ 肉

問四　次の①～④は中国語のことわざを日本語にしたものです。似たような意味で使われる日本のことわざとして最も適当なものをそれぞれ後のア～コの中から一つずつ選び、その記号を答えなさい。

①　大工が多すぎるとゆがんだ家が建つ
②　鉄の棒がみがかれて針になる
③　雨漏(もり)がするうえに連夜の雨
④　三日漁をして二日網(あみ)を干す

ア　三日坊主(ぼうず)
イ　渡りに船
ウ　焼け石に水
エ　知らぬが仏(ほとけ)
オ　泣き面(つら)に蜂(はち)
カ　転ばぬ先のつえ
キ　石橋をたたいて渡る
ク　雨だれ石をうがつ
ケ　船頭多くして船山に登る
コ　のど元過ぎれば熱さ忘れる